

5D-03

理科教育用語と漢字

--- 生物について ---

橘高 嘉弘

KITAKA Yoshihiro

山口大学教育学部

理科教育用語 生物

「理科は難しい。又、堅苦しくて面白くない。」という、学生・生徒の声をよく聞く。「わかりにくい」ことの原因の一つに、用語の問題がある。日常生活で使わない学術用語を用いたり、ときには、日常生活の用語を、特殊な意味に用いたりして、学習者を悩ませることがある。

用語はその文字（漢字）から判断することが多い。理解しにくい用語、誤解しやすい用語については、その文字の意味をよく理解させる必要がある。昭和63年及び平成2年改訂の学術用語集動物学編・植物学編では、例えば「胚」など、常用漢字以外の文字が学術用に限って使用が認められたのも、かなでは真意が伝えにくいからであろう。また、用語の文字（漢字）の由来を知ることによって、理解しやすくしたり、興味をもたせる事のできる場合もある。

筆者はこれまでに、物理・化学・地学の領域で、そのことについて述べてきたので、今回は生物領域の用語の一部について述べる。岩波生物学辞典等では、動物・植物の名称は取り上げられていない。しかし、ここでは、広義に、小・中・高校の理科の授業にでてくる動物・植物の名称も含めることにした。

学習指導要領の改訂で、身近な事物・現象が多く取り上げられるようになった。中村浩氏が言っているように、生物に親しむ第一歩は、その名を知ることである。動物・植物の名は、教科書ではカタカナでかくことになっている。いろいろなきさつがあつてそのようになったのであろうが、漢字で表してみると、以外に面白いこともある。

一例として、「ムシ」について述べてみる。虫とは一般に昆虫のことと思っている人が多い。D社の生活科の1年の教科書に、「むしとあそぼう」という題があり、アリ・テントウムシ・ダンゴムシ・カタツムリの図が載っている。「カタツムリが虫か？ 団子虫も昆虫ではない。」と思われた人も多いと思う。山口大学教育学部小学校教員養成課程の学生21名にきいてみたが、団子虫は12名、カタツムリは6名が虫と答え、他の者は虫ではないと答えた。

しかし、団子虫には「虫」という字がついているし、カタツムリも、デンデンムシという別名があるし、蝸牛とも書き、「蝸」だけでもカタツムリの意である。昔から両者とも「虫」として取り扱われてきたのである。しかし、曖昧な言葉で、学術用語としては、「虫」という分類はない。

また、「ムシ」の漢字も常用漢字の「虫」と、常用漢字にはない「蟲」がある。手元の国語辞典・漢和辞典で調べてみると、次のようである（抜粋）。

広辞苑：① 本草学で人類・獣類・鳥類・魚介以外の小動物の総称。昆虫など。②以下略
藤堂明保編、学研漢和大辞典：虫：まむし

蟲：① むし、昆虫の総称

② 動物の総称、羽虫は鳥類、毛虫は獣類、甲虫は亀類、鱗虫は魚類、裸虫は人類のこと。

〔解字〕虫は、へびの形を描いた象形文字で、まむしのこと。蟲は虫を三つあわせた会意文字で、多くのうじむし。転じて、いろいろな動物をあらわす。もと、虫と蟲は別の字であるが、

のち、虫の字を蟲の略字として用いる。

次に、昆虫の「昆」の字について、その意味を前記の学生に尋ねてみたが、わかる者はいなかった。辞書をひいてみると、藤堂明保編、学研漢和大辞典では

昆：なかま、むれ、まるく集まったなかま、その代表的なものがこん虫である。

昆の字は、「日+比(ならぶ)」の会意文字で、多くの者が日光のもとに並んだことを示す。

実際に、木や草の葉に幼虫の群がる様子をみれば、蟲の字や、昆虫の意味がなるほどと感じるであろう。

昆虫のほかに、は虫類(トカゲ・ヘビ・ワニなどの類)や鉢虫類(くらげの類)は、「虫」の字のつく類であるし、両生類の「カエル」も漢字では「蛙」で、虫偏の字である。蛙の字は、「意符の虫と音符圭」で、圭は蛙の鳴き声を表すというのも面白い。

次に、櫻(桜)、百合(ユリ)の字の由来を学生に想像させてみた。

櫻：「花びらが貝のように見えたから貝を入れ、女性を思い起こさせるから女の字を入れた。

(木偏については省略)」

「木のそばに女の人がいたら、上から貝のような花びらが降ってきたことから、このような字になったと思う。」

百合：「ユリの美しさは、米百合に値するという意味であろう。」

「他の花を百個合わせたように美しい花だから。」

これに対して、辞書では次のようになっている(抜粋)。

藤堂明保編、学研漢和大辞典：櫻：嬰(エイ)は「貝二つ+女」の会意文字で、貝印を並べて、首に巻く首飾りを表し、とりまく意を含む。櫻は「木+音符嬰」の会意兼形声文字で、花が木をとりまいて咲く木。

百合(ヒャクゴウ)：① 多くの香りを調合した香 ② ゆり科の植物の総称。山野に自生し、また栽培する。花は大きく、かおりが強い。ゆりとも読む。

岩波漢和辞典：百合(ゆり)：草花の名。細片が多数重なり合った根を持つことから「百合」と名づける。(厳密には地下茎である。)

生物の名や、生物学用語の漢字の意味を学ぶことについて、学生の感想を尋ねてみた。

「漢字はその生物の特徴等を表しているから、漢字と結び付けて、動・植物を教えると、インパクトが強くてよいと思う。」

「面白いと思います。昔の人の心もわかって、楽しい気持ちになります。」

漢字の由来などは、記憶させる必要はなく、ときおり取り扱ってみれば、面白いと思う。

◎ 参考文献

梅埜国夫著、「学術用語集動物学編」及び「学術用語集植物学編」の改訂にともなう高校「生物」のおもな用語の新旧対照表、実教出版、1991

山田常雄他6名編、「岩波生物学辞典」第2版、岩波書店、1977

中村浩著、「植物名の由来」、「動物名の由来」、東京書籍KK、1990

新村出編、「広辞苑」第4版、岩波書店、1991

藤堂明保編、「学研漢和大辞典」、学習研究社、1981

藤堂明保著、「漢字の話 上・下」、朝日新聞社、1991

山口明穂・竹田晃編、岩波漢語辞典、開成出版KK、1987

尾崎雄二郎他4名編、「角川大辞源」、角川書店、1992